

## 昭和の南海地震体験談

氏名:石本 禎男(いしもと さだお)  
生年月日:昭和3年3月18日  
地震を体験した場所:和歌山市・自宅寝室  
当時の家族状況:父、母、祖父、祖母、姉



### 1) 地震発生時の状況

当時19歳で、航空隊の予科練から戻り、家業の漁業・農業・海苔の養殖事業をしていた。自宅離れの寝室で就寝中、強い揺れが起き、目を覚ました。揺れ始めてすぐに飛び起き、母屋との間にある庭に出て、マキの木に掴まっていた。家族も全員が庭に出て一緒に掴まり、揺れが収まるのを待った。激しい縦揺れが長い間続き、電線のアースがショートする様子が見えていた。先人達や親から「大きな地震が起こるのはもの凄く晴れた日」だと聞いていたが、その通り、夜明け前の暗い時間帯だったが、無風で雲一つない月夜だった。

### 2) 津波襲来時の状況

地震＝津波の認識は無かったので、寝室に戻り再び布団に入ったが、10分経たないうちに土手から漁師の老人が「津波やぞー！」と叫んでいるのが聞こえ、すぐに着替えて浜に行くと第1波が引いたところだった。300m程度沖の方まで海水が無く、海底に3隻の船が取り残されていた。小船には1人のおじさんが乗っており、第2波が来た時に陸に流され、浜に乗り上げ助かった。大きな網の船は転覆防止に2隻を繋いでイカリを打っていたが、第2波の引き潮で沖に流された。同い年の漁師が乗っていたが、そのまま流された。昔からの言い伝えで「津波は12回来るもの。初め大きく、だんだん小さくなる」と聞いており、浜で回数を数えていた。7回目が来た後で波も小さくなるだろうと、まだ暗かったが流された船を探す為に何人かで船を出した。黒江方向に流されているだろうと見当をつけて櫓を漕いだが、船が下津方向に向いた時に、櫓を漕ぐより潮の流れの方が速かった為、危険だと判断し、潮の流れの境になっていた毛見山まで戻り、和歌山市方面の海上で待機し、明るくなってからもう一度捜索に向かい、戸坂沖で無事に救出した。その時通った冷水から塩津の海岸線は、流れてきた物で一杯で、漆器の材料や瓦が乗ったままの小屋まであった。

### 3) 家族の行動・被害

自宅は高台にあり、家族・家屋共に被害無し。開けた平地1000mの浜なので、潮が押し来てても逃げる所がある為、昔から潮が上がるという事は無い。地震による被害も無し。

### 4) 集落・周囲の被害

自宅地域で浸水や倒壊などの被害は無かった。

地震の翌日、知人に頼まれ、黒江駅まで同行する事になった。船尾地区に住んでいた友人も心配だったので訪ねる事にし、毛見の自宅から国道42号線を歩いて海南市に入ると、湾に浮いていた15～20トン級の貨物船が、家の間を通過して海南第1中学校前の国道に乗り上げていた。朝8時頃だったが、温山荘の辺りからはまだまだ水が引いておらず、知人を背負って送り届けた。その後、みなと橋付近の友人宅を訪ね、差し入れをした。低い土地の地域の上水路の中から水が吹き上がり、一番浸水の被害が多かった。ほとんど1階部分は浸水し、水が残っていたので2階部分で生活していたようだ。胴靴を履いていたので、昼頃まで海南市内を歩いて見て回った。東浜日方まで行くと、土地が高くなっているため、浸水被害は小さそうだった。海南駅辺りでは浸かっていた。

地震から2日後、海南市内海地区に住んでいた知り合いの家に掃除の手伝いに行った。畳が流失してしまい、床板の上にスコップで取らないといけない程の泥が5、6cm積もっていた。庭の池にはガシラが泳いでいた。

#### 5) 地震・津波後の生活

地域に被害は無かったが、浜の海底藻場が津波により、全て流失してしまった。底から取られて何も残らなかった。夜間船引き網という藻場専門の漁師がいたが、藻場流失によりいなくなってしまった。藻場は豊かな漁場で、それだけで充分生活が出来たが、漁種を変えざるを得なくなった。



#### 6) 次の災害への備え

地形に恵まれている為、特に無し。

#### 7) その他

後から聞いたのだが、戸坂沖まで流された網の船は、湾を2、3回まわって流れ、途中冷水を通った時はかなりの大波だった。冷水辺りで網を引いていた漁師3人は、12時過ぎの休憩中に活け場の魚が暴れて変だな、と思ったら津波だった。潮に流され、湾を左回りに端すれすれで3回まわり、琴の浦リハビリセンター前100m程の所で潮が引いてしまい、海底に船が据わってしまった。3人は飛び降りて堤防まで走った。次の波が来ていたが無事だった。

新和歌浦バス停の下、1、2軒が浸水した。